

## 感情表現の日・仏対照

中 川 良 雄

## は じ め に

「おどろく、よろこぶ、うれしい、かなしい」等の人間の心理現象を表すことばを述語として組み立てられる感情表現は、次の(1)～(3)のように、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の三つの構文が可能である。今、日・仏語を対照させてみると、

- (1) 仏: Je ne me sentais absolument pas gênée et son air solennel m'étonnait. (Bonjour, 32)

日: 私はちっとも気にはしていなかったので、彼の礼儀正しい態度にはびっくりした。(27)

- (2) 日: 台長夫婦はなんで娘は東京へかえるのがそんなにうれしいのかと訝った。(潮騒, 100)

仏: Ils étaient surpris de voir combien leur fille était heureuse de retourner à Tôkyô. (156)

- (3) 日: . . . , このような娘のそばに横たわることは、この世ならぬよろこびなのにちがいない、. . . (眠れる, 42-43)

仏: . . . , s'étendre aux côtés d'une fille comme celle-ci était certainement une joie sans pareille au monde. (48)

のように、日・仏語ではほぼ一対一の対応を示す場合もあれば、次のように他の構文に書き換えられたりすることも少なくない。

- (4) 日: 真暗な影の世界はおそろしかったが、. . . (金閣寺, 24)

仏：L'univers, avec ses ombres opaques, m'effrayait . . . (55)

(5) 仏：Ce qui me chagrînait davantage, c'est qu'Amélie eût osé dire cela devant Gertrude ; . . . (La symphonie, 53)

日：なお一層私にとって辛かったのは、アメリーがそんなことを、ジェルトリュードのいる前でずけずけと言ったことだ。(37)

(4)は日本語原文の形容詞述語文を仏語訳文で動詞述語文へ書き換えたものであり、(5)はその逆に動詞述語文から形容詞述語文への書き換えである。このような対応は、言語各々の表層にある表現構造の差異にこそちがいがいが、いずれの形式を用いるにしろ、感じ手のかくかくの深層心理状態を具現していることには変わらない。ただそのような感情を経験させる原因そのものに対する感じ手の受け止め方において若干の相違があるのみである。

本稿では、これら感情を表す述語表現を日・仏対照させながら、それらの表現相互間の関係、および述語表現全般の中での位置づけ、ひいては述語表現の類型化について若干考えてみたい。

## 1. 述語タイプの分類

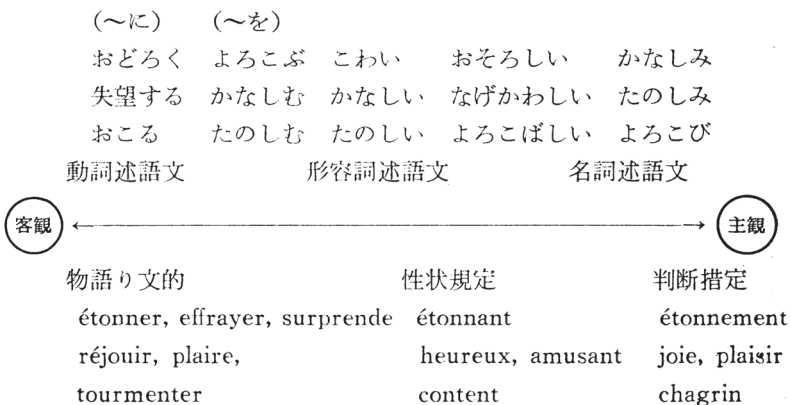
寺村(1973, 1982)は、「おどろく、失望する、よろこぶ、悲しむ、悲しい、こわい、おそろしい、なげかわしい」等々といったことばを述語として組み立てられる感情の表現は、述語が動詞であるものと、形容詞であるものとの二つにまず大きく分けることができ、これらの感情の表現を介して、動的事象の描写と、性情属性の規定が連続する、としている。そして上の例のうち、はじめの四つは感情動詞の例であり、あとの四つは感情形容詞の例である、と分類している。

また感情動詞は、「おどろく、失望する」のように、「～に」という形の感情の動きの誘因を表す補語をとるタイプのものと、「よろこぶ、悲しむ」のように、「～を」という形の感情の向かう対象を表す補語をとるものに分けるこ

とができ、感情形容詞は、「私はくもがこわい」「水が欲しい」のように、話し手自身のある特定の対象に対する感情を直接表出するタイプのもので、「さそりはおそろしい」「政治道徳の低下がなげかわしい」のように、感情の直接表出というよりはむしろ感情をもととした主観的な性情規定、判断のような性格のものとは区別される、と述べている。

さらに動詞述語のうち、「おどろく、失望する」の類の表現は、外面的に観察が可能であるという特徴から、動作・出来事の表現と接しており、また形容詞述語のうち、「さそりはおそろしい」等の感情的判断の類は、一般的な属性規定の形容詞による表現（「地球は丸い」）につながっていく、と考えている。

本稿では、上記の述語が動詞であるものと、形容詞であるものに、さらに名詞であるものを付け加えたい。述語が名詞であるものは、「子供の成長が親の楽しみだ」「彼がまだ40歳代であるとは驚きだ」のように、判断措定的<sup>4)</sup>性格を持っており、動詞述語の文が、話し手がそれらの事象の描き手として客観的、物語り文的に描写するという性格を持っているのと両極をなす。形容詞述語の文は、これら両極の中間に位置するもので、動詞述語文のような物語り文的客観描写の側面と、名詞述語文のような主観的な判断という側面とを併せ持つ。



[表 I]

仏語についても、ほぼ同様の分類をたてることができる。ただ仏語には、「～に」格をとる動詞と、「～を」格をとる動詞との区別がないことにおいて、日本語とやや異なる。その点日本語の方が注意を要するが、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の三者を有することについては、日・仏語に限らず、多くの言語に普遍的な性質であろう。

これら三つの述語文は、はっきりと段階をなして三つのタイプに分類されるというよりは、「客観」と「主観」を両極とした連続体のスケールの中で位置づけたい。動詞文であっても必ずしも物語り文的であるとは言いきれず、性状規定の意味をも有する（「ビタミンCは肌の疲れを取り去る」）し、名詞文であっても性状規定的性格を持つ（「あいつは変人だ」）場合もある。

## 2. 日・仏語対照

### 2.1 動詞述語文

(6) 仏：Cette question m'a beaucoup étonné . . . (*L'étranger*, 101-102)

日：この問いはひどく私を驚かせた。 (70)

上例で、仏語原文の主語 'cette question' は無生名詞であり、動作主の主格というよりは、「私が驚く」という感情を起こさせる原因格と考えた方がよい。日本語訳についても同様に、主語「この問いは」は、そのような感情の源となる原因格と考える。また目的語の 'me' 「私を」は、対象格というよりは、驚きの感情を有するものとして、経験者格とする。すなわち動詞 'étonner' は、原因格名詞を主語とし、経験者格を目的語とする他動詞文を作る。一方日本語訳文では、自動詞「驚く」を使役化させることによって、仏語訳文の他動詞文に対応させている。

ここで注意しなければならないのは、日本語の他動詞文と使役文の主語は、有生名詞であることが原則であり、仏語では有生・無生を問わず主語になりうることである。日本語では「何が私ニソウサセタカ」式構文は、いかにも翻訳

調である。

その仏語の他動詞文の原因格が、日本語では原因を表す副詞節となって表されることがある。

- (7) 仏 : La perpétuelle réussite de mon mensonge me surprenait.

(*Le diable*, 110)

日 : 嘘がいつも成功するので、僕は驚いていた。(93)

- (8) 日 : お父さんが亡くなって、ずいぶん悲しかったろうねえ。

(金閣寺, 39)

仏 : La mort de ton père a dû t'affecter beaucoup, hein? (77)

先にも述べたように、日本語では無生名詞（原因格）を主語にもつ他動詞文を嫌う傾向があるため、仏語の他動詞文は、日本語では好んで経験者格の自動詞文になる。

- (9) 仏 : Je ne me sentais absolument pas gênée et son air solennel m'étonnait. (*Bonjour*, 32)

日 : 私はちっとも気にしていなかったのに、彼の礼儀正しい態度にびっくりした。(27)

- (10) 日 : . . . , その巧みさに私はおどろいた。(金閣寺, 137)

仏 : Sa virtuosité me stupéfia. (212)

このような日・仏語間の対立故に、日本語は能格型（「なる」型）の言語であり、英語や仏語は対格型（「する」型）の言語である<sup>9)</sup>、などと言われる。仏語では、他動詞文を受け身文に変形することによって、経験者格が主語となり、原因格は前置詞句となって、日本語の自動詞文に対応する。

- (11) 仏 : Par exemple, j'étais tourmenté par le désir d'une femme.

(*L'étranger*, 121)

日 : たとえば、女に対する欲望で苦しんだ。(83)

- (12) 日 : 「眠れる美女」の家にも江口はややあきている。(眠れる, 95)

仏 : Eguchi était un peu dégoûté de la maison des «Belles Endor-

mies》.

さらに仏語の代名動詞文は、経験者格を主語とする動詞述語文を作る。それに対応する日本語文は、やはり経験者主語の自動詞文である。

(13) 仏 : Je m'affectais de ce que Marthe pût mentir sans scrupules à sa mère, . . . (Le diable, 81)

日 : 僕はマルトがいささかの躊躇もなく母親に嘘をつけることを、深く心に悲しんでいた。(70)

(14) 日 : そこで彼女等の身上を本気で心配をし、彼女等の倅せをわがことのように慶んだ。(潮騒, 40)

仏 : Ils s'intéressaient vivement au sort de ces filles et quand la chance favorisait l'une d'elles ils s'en réjouissaient comme s'ils avaient été touchés aussi. (65)

## 2.2 形容詞述語文

形容詞述語文は、常に相対的な品定め、つまり「誰にとってどうか」という性質を持っている。その「誰にとって」は、いわば性状規定や価値判断の基準であるが、それが文中に現れなければ、その性状規定、価値認定が、誰にとっても一般的に妥当するものであることを示すことになる<sup>(9)</sup>。

次例(15)は、「誰にとって」の経験者が現れず、一般的な価値認定文である。(16)では経験者格は、仏語では無強勢の人称代名詞によって表され、日本語訳文では「～にとって」で表されている。また(17)の日本語原文では、経験者格は文面には現れていないが、経験者格が誰であるかはコンテキストから明らかであるし、日本語では主観的な気持ちを表す形容詞は、その形のままで第三者の感情を表すことができないという制約がある。仏語訳文では、'pour～'によって現れている。

(15) 日 : 照爺は怖いよってなア (潮騒, 80)

仏 : C'est que l'oncle Teru est terrible! (125)

(16) 仏 : Ah! que son ironie m'est douloureuse, . . .

(*La symphonie*, 97)

日：ああ、この皮肉は私にとってどんなに耐え難いものだろう。(68)

(17) 日：寝込ミニ踏ミ込ンデ眼ヲサマサセルノモ可哀ソウダナ(瘋癲, 146)

仏：Tu le tireras d'un profond sommeil, ce sera dommage pour lui.

(126)

さらに仏語原文で他動詞の経験者格としておこった目的語は、日本語訳文で形容詞述語文への書き換えが行われた時にも、上と同じような形で顔を出す。

(5) 仏：Ce qui me chagrînait davantage, c'est qu'Amélie eût osé dire cela devant Gertrude ; . . . (*La symphonie*, 53)

日：なお一層私にとって辛かったのは、アメリカがそんなことを、ジェルトリュードのいる前でずけずけと言ったことだ。(37)

(18) 仏：Elle s'étonnait que Marthe pût se compromettre avec un gamin de mon âge. (*Le diable*, 89)

日：マルトが僕のような腕白小僧相手に危ない遊びをしていることが、母には不思議でならなかった。(76)

### 2.3 名詞述語文

名詞述語文は、通常絶対的判断を示す。

(3) 日：. . . , このような娘のそばに横たわることは、この世ならぬよ  
こびなのにながいない、. . . (眠れる, 42-43)

仏：. . . , s'étendre aux côtés d'une fille comme celle-ci était certainement une joie sans pareille au monde. (48)

上例では経験者が示されず、話者の主観をよりどころとした判定文である。経験者が文面に現れた場合には性状規定的になる。

(19) 日：この世に私と金閣との共通の危難のあることが私をはげました。  
(金閣寺, 47)

仏：Le fait qu'en ce monde nous fussions, lui et moi, pareillement exposés aux mêmes périls m'était un soulagement. (87)

(20) 日：人から贈物をもらったことのない私には、何であれ、贈物はうれしかった。  
 (金閣寺, 165)

仏：Personne ne m'avait jamais fait de cadeau ; c'était pour moi une grande joie que d'en recevoir un, quel qu'il fût. (211)

経験者格の現れ方は、上の形容詞述語の場合と全く同様である。

## ま と め

以上のように、人間の心理現象を表すことばを述語に持つ感情表現（動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文）をそれぞれ日・仏語対照させると、次のような構文特徴が明らかになる。

日本語では、いわゆる「何が私ニソウサセタカ」式他動詞文よりも、かくかくの感情を起こさせる原因格を副詞節に持つ自動詞文が好まれる。また仏語では、感情の経験者は人称代名詞等によって表されるが、日本語でその経験者を表すには、「～にとって」などによって具体的に明示しなければならない。経験者が明示されない場合には、一般的な価値認定文であったり、コンテキストから経験者が誰であるかを判断しなければならなくなったりする。いわば日本語の感情表現は、より主観的性格を帯びていると言える。

以上のような点において、表Iに示した図を用いれば、日本語の感情表現はやや右より、反対に仏語ではやや左よりの構文特徴を持つと言える。

### 注

- (1) 佐久間。
- (2) 池上 (1981, 1982)。
- (3) 寺村 (1973)。

### 文例出典

*L'étranger* CAMUS Albert *L'étranger*, folio.  
 窪田啓作訳『異邦人』新潮文庫。



- La symphonie* GIDE André *La symphonie pastorale*, folio.  
神西 清訳『田園交響楽』新潮文庫。
- Le diable* RADIGUET Raymond *Le diable au corps*, Livre de Poche.  
新庄嘉章訳『肉体の悪魔』新潮文庫。
- Bonjour* SAGAN Françoise *Bonjour Tristesse*, Livre de Poche.  
朝吹登水子訳『悲しみよこんにちわ』新潮文庫。
- 眠れる 川端康成『眠れる美女』新潮文庫。  
R. Sieffert 訳 *Les Belles Endormies*, Livre de Poche.
- 金閣寺 三島由起夫『金閣寺』新潮文庫。  
Marc Mécéant 訳 *Le Pavillon d'Or*, folio.
- 潮 騒 三島由起夫『潮騒』新潮文庫。  
G. Renondeau 訳 *Le tumulte des flots*, folio.
- 瘋 癲 谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』中公文庫。  
G. Renondeau 訳 *Journal d'un vieux fou*, folio.

## 参考文献

- 池上嘉彦(1981)『『する』と『なる』の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店。
- (1982)「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」国廣哲彌編『日英語比較講座第4巻発想と表現』大修館書店。
- 小山敦子(1966)『『の』『が』『は』の使い分けについて—展成文法理論の日本語への適用—』『国語学』66 国語学会。
- 中川良雄(1985)「受動表現の日・仏対照」『年報・フランス研究』19 関西学院大学フランス学会。
- (1987) a 「状態受け身とアスペクト—日・英・仏語対照—」『研究論叢』第XXIX号 京都外国語大学。
- (1987) b 「日・英語の受身文—新聞を読む—」『研究論叢』第XXX号 京都外国語大学。
- (1990)「日・仏語の使役表現」『研究論叢』第XXXV号 京都外国語大学。
- 奥津敬一郎(1980)「動詞文型の比較」『日英語比較講座第2巻文法』大修館書店。
- 佐久間鼎(1983)『現代日本語の表現と語法』くろしお出版。
- 寺村秀夫(1973)「感情表現のシンタクス—『高次の文』による分析の一例—」『言語』第2巻2号。
- (1974) 'Emotive sentences in Japanese' *Nobulae* 1号 大阪外国語大学。
- (1982)『日本語のシンタクスと意味』第I巻 くろしお出版。

(京都外国語大学助教授)